
CAR LOVE LETTER 「Love is over」

YAS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C A R L O V E L E T T E R 「Love is over」

【Nコード】

N7648H

【作者名】

Y A S

【あらすじ】

「もう、終わりにしよう」その言葉に男と女は別々の思いを馳せる。
(テーマ車種：スバルレガシィ) (BH5)

(前書き)

車と人が織り成すストーリー。車は工業製品だけれども、ただの機械ではない。

貴方も、そんな感覚を持つたことはありませんか？

そんな感覚を「CAR LOVE LETTER」と呼び、短編で綴りたいと思います。

「もう、終わりにしよう。」俺は言葉少なに彼女にそう告げる。突然の事だ。彼女は少し険しい表情で俺の目を見つめる。俺から切り出した話だ。俺から目をそらす事は出来ない。しばらく俺達は見つめあっていただろう。彼女から視線を伏せ、「そうね・・・。」と弱々しく呟いた。

俺は無意識にこぶしを握り締めていた事に気付く。掌にはずいぶん汗がにじんでいる。俺の選択は間違っていたのだろうか。

別に好きな女が出来たと言う訳ではない。彼女が嫌いになったと言う訳でもない。

俺は仕事で大きなプロジェクトを任せられ、この頃は朝から夜遅くまでつきつきりだ。それが嫌だと言う訳ではなく、むしろ充実感がある。

また、最近始めた趣味も楽しい。彼女には理解してもらえなかったが、俺にとってはそれも大切な時間だ。

最近の俺には、彼女と過ごす時間が無い。そんな状況で、いつまでも彼女を俺に繋ぎ止めておくのは失礼な事ではないか。そうして俺は、この結論に至ったんだ。

彼が神妙な面持ちで、私に歩み寄る。

いつもとは違うただならぬ空気を私は読まざるを得なかった。

ほんの少しの間に色々な思考が巡る。彼の口から発せられた言葉は、私の想定の中でも最悪なものだった。

どうして彼がこの事を口にしたのか、彼にとって私と過ごした6年は一体何処へ行ってしまったのか、私は彼の目を見つめ、問いただきたい気持ちでいっぱいだった。

しかし彼も思い悩んで決断したのだろう。瞳の奥には強い意思が感じられる。

私は残念な気持ちと、ほんの少し彼を応援する気持ちを込めて、「そうね・・・」と答え、視線を落とした。

彼に違う女の影が見える訳ではない。しかし、少しずつお互いの距離が離れて行っていたのは感じていた。

彼の心を奪った何物かに嫉妬を感じながらも、彼の支えになれなかった自分に情けなさを感じた。

随分長い時間を共に過ごした。傍に居るのが当たり前、結婚しなかったのがおかしい位だ。

お互いの価値観、領域、空気。一緒に過ごす時間と同じ位、そういうのを俺達は尊重した。

干渉せず、離れもせず、そんな微妙な距離感ですつと過ごして来たように思える。

もちろん、愛はあった。お互いの感情を強く感じる事もあった。それがいつからだろうかな、そういう機会が少なくなっただけだ。は。

良く言えば安定、悪く言えば物足りない、俺達の関係はそんなだった。

彼がワインを開ける。これが二人の最後の晩酌になるのだろうか。お酒が好きな彼は、いつもちびちびとやりながら、友達の話、仕事の話、趣味の話、そういうのを語ってくれた。何処に行きたい、何がしたい、そういう提案はいつも彼から。私はいつもついていっただけ。でも私にはそれでよかった。私は彼が居てくれればそれでいい。刺激的な事よりも、彼との安心感が何よりも大事だった。

俺の帰りを、彼女は一人俺のアパートで待つ。文句も言わなければ、笑顔も無い。随分退屈な思いもさせてしまっているだろうか。多くを語らない彼女からは、なかなかそういう物は感じ取りづらい。殊更帰りの遅い最近では、意思疎通を図る機会も減ってしまっている。

俺と過ごした時間は、彼女にとって楽しかったのだろうか。彼女にとって充実していたのだろうか。

彼のアパートで、彼の帰りを待つ私。待つのが好きな訳ではないが、私は待つのは苦にならないタイプだ。アパートの前をスバルの車が通る度に、彼が帰って来たかと、私はまるで甘えた子犬の様に耳を立てる。分かる。これは彼じゃない。彼のレガシイのエンジン音が、私は自分のリズムに合っている気がして、とても好きだった。同じスバルの車でも、彼のレガシイの音は違って感じた。

翌日、彼女の荷物をレガシイの荷室に詰め込む。
荷室の広いこの車は、仲間との釣りやキャンプでは大活躍だった。
毛布と寝袋を持ち込んで、彼女とスキー場の開場を待ちたりもした。
まさかこの車に彼女の生活道具を載せる事になるとはな。

この車を購入するとき、普段意見を言わない彼女が、珍しく意見を言った。

俺は白がいいと思っていたのだが、彼女は絶対に青だと言いつつ、結局彼女の意見を通したのだから、俺も青を選んでよかったと思っている。

俺と青いレガシイは、彼女と彼女の暮らしを載せて、しばらくぶりに彼女のアパートへ向かう。

この綺麗な青に、ショールームで出会って瞬間に釘付けになった。
私もありふれた白よりも、空よりも濃く、海よりも鮮やかなこの青が絶対にこの車に似合っていると思った。

この車で、彼はいろんな所へ連れて行ってくれた。
名所も行ったしスポーツジムにも行ったし、わざわざ隣街のスーパーに買い物に行ったりもした。
時には、私のアパートに送ってもらったりもした。ほとんど、その必要はなかったけれど。

二丁目の信号を青のまま通過した。少し急げば三丁目の交差点を青のまま曲がれるんだ。

走り慣れたこの道。俺はいつもの様に加速し、青のまま三丁目の交

差点をクリアした。

すると彼女が、ふふつと微笑む。何？と聞くと、そうそう、この感じ、と。

彼女も走り慣れた道を思い起こしている様だった。

二丁目から三丁目にかけて、彼はいつも一気に加速する。何もそんな慌てなくても良いのに、といつも思っていた。

一度理由を聞いたなら、このターボの加速が心地いいんだ、と言った事があった。

ホントは、信号で待たされるのが嫌いなくせに。

今日もいつもと同じく、二丁目から三丁目にかけて、レガシイの快音が響く。

今日だけは、俊敏なボクサーもおやすみしてくれればよかったのに。

彼女の荷物をアパートに降ろす。彼女の部屋にはほとんど俺の荷物はなかった。

きつと俺は、自分の部屋がものすごく広く感じるのだろう。だが、それもすぐにも慣れるだろう。多分。

俺の去り際、レガシイのエンジン音を聞いた彼女は、この音を聞くのと、思い出しちゃうかも、と漏らした。

ボクサーサウンドを鳴らしているスバルはたくさん居る。それも、

すぐに慣れるぞ。多分。

彼の部屋の鍵を返す。私の部屋から彼が持って行くのはそれだけだった。

部屋には荷物が山積みになった。しばらくはこの片付けで気が紛れるかな。

でも、きっとボクサーサウンドを聞く度に、また私は耳を立てるのかしらと思う。

この車の事だけじゃなく、彼との思い出が、きっと蘇ってくるんだと思う。

俺と彼女は、すれちがいだったのかも知れない。

そのすれちがいも、もうすぐ終わる。

私達の齒車は、一体どこから狂ってしまったのかしら。

それでも、レガシイのボクサーは規則正しく快音を響かせている。

私達が出会った、あの頃のように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7648h/>

CAR LOVE LETTER 「Love is over」

2010年10月10日14時21分発行